



Preoperative Planning for Eccentric Rotational Acetabular Osteotomy

著者名	森田 裕司
発行年	2016-03-18
URL	http://hdl.handle.net/10470/31568

主論文の要旨

Preoperative Planning for Eccentric Rotational Acetabular Osteotomy
(偏心性寛骨臼回転骨切り術の術前作図方法)

東京女子医科大学整形外科学教室
(指導：加藤義治 教授)

森田 裕司

日本関節病学会誌 第33巻 第4号 427～435頁 (平成26年12月15日発行)
に掲載

【要 旨】

寛骨臼形成不全による二次性変形性股関節に対する手術方法の一つに、術前に大腿骨頭の定量的な内方化と遠位化を計画することが可能な偏心性寛骨臼回転骨切り術 (ERAO) がある。我々は、ERAO 術前の骨頭中心 O と術後の骨頭中心 P を結ぶ線 OP の垂直二等分線上に頂角が寛骨臼の回転角 θ° となるように頂点 R を決定し、頂点 R を中心に寛骨臼を θ° 回転すると、骨切り円内のすべての点は、頂点 R を中心に θ° 回転する。と仮定し、骨切り高位と鑿の曲率半径を優先した第1作図方と、内方化と遠位化を優先した第2作図方を考案した。今回、この仮定の妥当性と ERAO を行う際の至適な鑿の曲率半径を検討した。

対象は術者により作成された術前作図に基づき ERAO が行われた4例である。術者の作図、第1方の作図、レントゲン像で、手術前後の骨頭中心の内方化、遠位化を比較した。また、第2方の作図で鑿の曲率半径を推察した。内方化はレントゲン像との比較で、術者の作図で2～3mm大きく、第1方との差は1mm以内であった。遠位化は術者の作図、第1方ともに1mm以内の相違であった。限られた症例数だが、骨頭中心の移動は第1方とレントゲン像でほぼ一致したことから、骨切り円内のすべての点は、頂点 R を中心に回転するとの仮定が成立していると思われる。また、第2方の作図から推察した骨頭の内方化を得るための鑿の曲率半径は32から42mmであった。